

みんなで学び、守り、未来につなぐ谷津田

市民×学生×専門家の協働による新しい農地保全

【活動グループの紹介】

立正大学は、2022年に開校150周年を迎えた歴史ある大学です。東京都品川区と埼玉県熊谷市の2ヶ所にキャンパスを有しており、今回訪れた谷津田イノベーション研究会は緑豊かな自然と最新施設が調和する熊谷キャンパスで活動しています。

地球環境科学研究科で環境システム学を専攻されている佐藤さんと後藤教授が中心となり、比企丘陵の有機栽培農地である谷津田を対象に窒素の収支を継続的に調査しています。ドローンなどの最新機器も活用しながら研究を進めています。

[立正大学HP](#)←学校の詳細はこちらから！

【取組の紹介】

谷津田イノベーション研究会では、比企丘陵の有機栽培農地である谷津田を対象に窒素の収支を調査し、窒素量のポテンシャルモデルを構築して、化学肥料に頼らない米づくりにつながる研究を続けています。

また同グループが調査・研究を行っている比企丘陵地域は、「比企丘陵の天水を利用した谷津沼農業システム」として令和5年に**日本農業遺産**に認定されています。八津沼に涵養した雨水だけで水稻栽培を行ってきましたが、近年後継者不足や気候変動などにより農法の維持が課題になっています。今回の一連の取組によって得られた科学的データの活用が、伝統的な農業システムの継承にもつながります。

グループ名

谷津田イノベーション研究会
(立正大学)



Q1 学生チャレンジに参加したきっかけは？



長期間にわたり研究を続けてきた中で、その成果を発表する機会として、教授より当チャレンジを紹介してもらったからです。

谷津田イノベーション研究会のみなさんに聞きました！

Q2 取組を進める中でやりがいを感じたことは？

裏付けのあるデータを提供することで、農家の方からの信頼を得ることができ喜んでもらったことと、

取組に関わった方から「水がきれいになった」「できた米が美味しかった」などの言葉をかけてもらったことです。



Q3 取組を進める中で大変だったことは？

ため池の水管理の調整です。
当研究会では土壌の状態をデータ化しており、効率的な配水のタイミングを把握できるようになりました。しかし、農家さんには自分の経験に基づいて行いたい方もいるので、了解を得るのに苦労しました。



Q4 水稻栽培技術は独学なのか？

埼玉県比企郡小川町で有機農業を実施されている方々を参考に水稻栽培をしています。特に長年有機農業に取り組まれている、霜里農場の金子さんを参考にしています。

現在は、有識者による有機稲作のセミナーを年間7回行っています。



取材を終えて

9月上旬、まだ残暑が感じられる中、立正大学の熊谷キャンパスを訪問しました。今年度みどり戦略学生チャレンジに参加されている谷津田イノベーション研究会を代表して、佐藤さんと教授の後藤先生にお話を伺いました。

当取組は、日本農業遺産に選定された地域でため池の水だけを使い無農薬・無化学肥料での水稻栽培を行っており、まさにみどりの食料システム戦略に合致した取り組みを実践されていると深く感銘を受けました。また、地元の農福連携組織や特別支援学級などとも連携をされており、多方面を巻き込んで取組をされている点も素晴らしいと感じました。

取材にご対応いただいた佐藤さんは大学院生であり、学部生時代も含め長期間にわたりこの取組を継続してきたとのことでした。ご自身の研究の成果やこちらからの質問に対しての回答を、終始穏やかに、かつ分かりやすくお話をされていたのが印象的でした。ただ、その内面に秘めた思いやこだわりを随所に感じる事ができ、「暑い町」として有名な熊谷で、学生さんの「熱い志」に触れることができた、そんな一日でした。

取材にご協力いただきありがとうございました！

